

秋田カエル村の村章 文字どおりカエルをデザインしたものだ。入会するとこれを刺しゅうした緑色のワッペンと、白色に緑のカエル村のTシャツを送ってくれる

●秋田カエル村

文明社会から抜け出て自然にカエろう

電気も水道もない自然のなかで

「カエル村」は、水によって生活するカエル(蛙)が、四季折り折りに合わせて自然に生きる姿を見て、『物』だけを追い求めて、あくせくと働く現代の人間生活をカエリ(省)み、もつと自然にカエル(帰る)、いまの生活をカエル(変える)ことを試してみようか、とはじまったものである。

「秋田の自然とまごころにふれ、都会に住む人に命の洗濯をしておおう」と、地元の人たちが場所と労力を提供して建設したもので、場所は秋田県西仙北(にしせんぼく)町大沢郷大

場台にある。地図上でも、西仙北周辺をさがせば、この地名はすぐに見つけ出すことができる。

奥羽本線刈和野(かりわの)駅から車で約十五分、秋田空港からは車で約五十分。標高百三十メートルほどの、小高い雑木林の山を切り開き、その広さは約四十ヘクタールもある。

入り口から登るとすぐに、子の助小屋と呼ばれる炭焼き小屋があり、その前の広場には、丸太をタテに割り裂いてつくったテーブルと、木の切り株を利用したイスが設けられている。

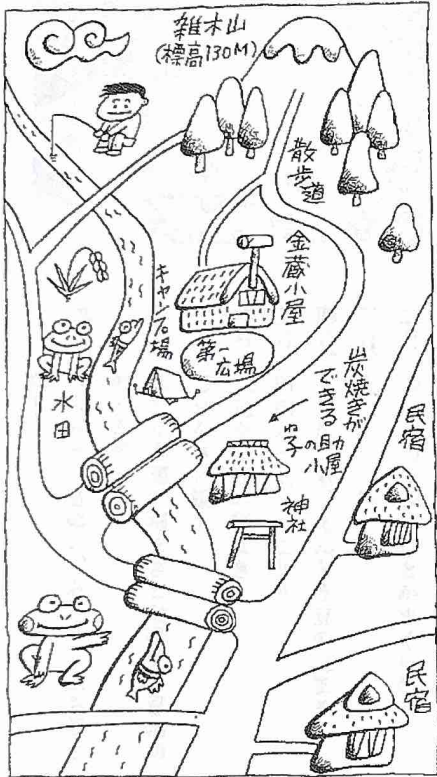
散策路は、三つのコースに分かれ、全長約八百五十メートル。山林のあいだを縫うようにして続くこの小道を、一周するには約三時間かか

った。

道のところどころには、樹木の名を説明する標示板が掲げられて、植物観察にも便利だ。

炭焼き小屋から丘を二つ越えたところに、金蔵小屋と呼ばれるクリの木で組んだかやぶぎの小屋が見えてくる。ここには、電気も水道もガスも、なにもない。

秋田カエル村

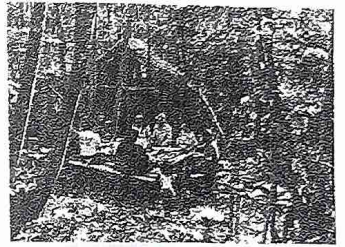


あるものは、むき出しの自然だけである。ここに入ったら、われわれは、大昔の祖先がやったように、枯れ木を集めて火を点(とも)し、自分たちで畑を切り開かなければならない。「自然のなかで暮らす。いまの生活をカエル(変える)ということをめざしてつくった施設だから、なにもないのはあたりまえ……」と発案者の佐々木正光さんは、こともなげに話していた。

四十ヘクタールの山林を開放

「いまの子どもたちは、自然に親しむとか、自然のなかで生活するということが、なくなっってしまった。子どもたちの生活や遊びというのは、もっと自由でなければいけない」

これが、佐々木さんが「カエル村」をつくる発想のきっかけだった。



子の助小屋の自然 入り口を登ると炭焼小屋・子の助小屋があり、丸太を裂いてつくったテーブルとイスがおいてある。あたり一面の緑の森で、自然のにおいが、人の心をなごませてくれる

「自然の動きに左右されながら、子どもは遊び、生活するんで、笑いや喜び、苦しみや厳しさは、自然のなかで学んでいくのではないかと考えたんです」
 こうした体験を、子どものときからしてほしい。これが「カエル村」を発案した、大きな理由だった。

この考えに賛同し、自分の持つ四十ヘクタールの山林を提供したのが、田村治治さんで、現在、村長役を務めている。

開村したのは一九八三年（昭和五十八年）十月十日、体育の日だった。

現在、この村の村民になっているのは二十五人。新聞やテレビのニュースで知ったのか、夏になると大ぜいの人が押しかけるといふ。

開村翌年の夏には、四、五百人も人が訪れた。

だが、高校生あたりになると、「なんだ、な

にもない、ただの山じゃないか」といつて帰っていく。

しかし、小さな子どもは、みるみるうちに目の色が変わり、木にぶら下がったり、かけずり回ったりして元気に遊ぶという。

「こんなエネルギー、どこにあるんですかねえ、子どもはまだ人間社会に毒されていないから、すぐ順応するんですね」と佐々木さん。

自然があなたを待っている

「カエル村」の村民になるには、この村の精神を理解し、その目的に賛同して一年分の村民費を払えば、誰でもなれる。

村民費は、一族について一口一万五千元。納入すると村民台帳に登録され、「カエル村」のワッペンと、Tシャツを一口について各一對贈ってくれる。現在村民に登録した二十五人は



かやぶきの金蔵小屋 電気もガスも水道もない。まったくの自然のなかでの生活は、都会の汗をさっぱりと流してくれる

東京や神戸の人が多く、夏には三、四泊して自然のなかの生活を体験していく。

村民の特典の第一に、四季折り折りの農作業の体験というのがある。

プログラムを見ると――

一月は、豆腐や納豆づくり、炭焼きとあった。豆腐や納豆づくりはともかく、炭焼きは全国でもめずらしい。

二月、刈野の大綱引きとかまくら祭り

三月、蕨（わら）細工

四月、じゃがいも、えんどう豆の種まき

五月、田植えとたけのことり

六月、大豆や小豆の種まき

七月、じゅんさい採り

八月、大根や白菜の種まきと盆踊り、雄物川のイカダ下り

九月、せり植え、きのこ、あけび、山ぶどう

狩り

十月、りんご狩り

十一月、みそやつけものづくり

十二月、炭焼き、もちつき

となっており、自分で植えたこれらの作物は草とりや肥料代などの管理費と自宅までの送料を支払えば、それぞれの家庭までとどけてくれる。このほか、この地方は杉の植林がさかんだが、この間伐材を利用して、家具・インテリア用品の製造も行っており、希望すればその製作も体験することができる。

優秀な指導者による手づくりのイスや帽子かけなど、実費を払えば手に入れることができ、家庭の家具調度をにぎわすことも可能である。

村民は、山小屋やテント、自炊用具の利用は無料だが、民宿への紹介もあり、宿泊について不便を感じることはない。

そのほか、年三回以上の「カエル村」からのプレゼント、「カエルの荷物」をうけることが

東北



杉丸太のシーソー 西仙北町では、杉の間伐材を利用して木工製品の生産もさかんで、その制作も経験することができ、販売もしており、一基の値段は三万円といわれている

できる。

その内容は、

五月、たけのこ、わらび、うどなどの山菜
八月、トマト、きゅうり、とうもろこし、お
くら、みょうがなどの野菜類

十月、りんご、くり、ぶどう、あけびなどく
だもの類のほか、新米など

一月、名物のいぶりたくあん、白菜、みそづ
けなどのつけものほか、もちなど

このほか、十日以上「カエル村」に滞在する
とカエル村特製の手づくりミノもプレゼントさ
れる。

いろいろと恩恵にあずかることもできるが、
それよりもまず、自然と向かい合って、電気も
ガスも水道もないところで、物質文明のなかに
とっぷりつかった我々が、二日でも三日でも生
活できるかどうかである。

山登りをして固形燃料やガスコンロを持ち

込み、インスタント食品で間に合わせている。
子どもの遊びといえば、テレビゲーム。

「これはなにも、大都会だけの現象ではなく
全国いたるところで見られることです。しかし
この大自然に接しますとね、おとも子どもも
いきいきとしてくるんです。やはり、人間にと
って自然は大切なんです」と語る佐々木さ
ん。佐々木さんは、日本ユニセフ協会秋田友の
会の代表も務め、「ソマリア(アフリカ)の飢饉
を救おう」と「愛の一粒運動」も行っている。

ともかく自然に接することは、なにも現代生
活からの逃避ではない。自然にカエリ(帰る)、
自然に向かいながら自分をカエリ(省)みて、
その生き方を考えながらカエ(変え)てみるの
も長い人生にとって必要なことかも知れない。
カエルがピョンピョン跳ぶように、全国にカ
エル村が増えてくれればと、木村さんは地元の
協力で、その運営にあたっている。